マンスリー BOAT RACE 号外 2020年10月15日

今村豊 引退

最低体重51kg→52kgで決意

10月8日・記者会見あいさつ

皆様、本日はコロナ禍の中、またお忙しいなか、お集まりいただきまして誠にありがとうございます。

施行者の皆様、ならびに日本財団、ボートレース振興会、モーターボート競走会、選手会の皆様には長い間本当にお世話になりました。ありがとうございました。

そしてマスコミ・報道関係の皆様には長きにわたり、取材やインタビューなどで大変お世話になり、ありがとうございました。

全国のファンの皆様には、長い間、ご支持、ご声援をいただき、ありがとうございました。皆様からのご声援が、走っている私にとって、どれだけ励ましになったか…、計り知れないものがあります。この場をお借りいたしまして、厚く御礼申しあげます。ありがとうございました。

引退のキッカケとなりましたのは、最低体重制限が51kgになった時から、自分の体調管理をするにあたって大変苦労してまいりました。

そんな中、この11月より最低体重は52kgに変更されます。その52kgに対して、私はちょっと限界を感じ、「今期限りかな」という風に考え、8月に行われました下関のボートレースメモリアルで、とも思いましたが、9月の末に徳山の記念レース（ダイヤモンドカップ）の斡旋をいただきましたので、その徳山で最後にしようと決めました。

徳山のレース場でデビューを迎え、引退はその徳山の記念レースでできたということは、本当に幸せ者だと思います。

昭和56年にデビューいたしまして、本日までケガなくやってこれた今、振り返ってみますと、本当に良いボートレース人生だったと思います。

特に印象に残っているのは、やはり初めてダービーを勝った平和島だったと思います。これはレースよりも、当時の笹川良一会長、橋本龍太郎運輸大臣に直接表彰していただいたことが特に印象に残っています。

今日、こうして引退をしましたところ、今は何か肩の荷が下りたような、ホッとしている自分が今、ここにおります。これからはゆっくり、のんびりと生きていきたいと思っております。

最後になりましたが、この私を育ててくれたこの素晴らしいボートレース業界に感謝しつつ、この業界がますます発展することを願って、私からの引退のコメントとさせていただきます。ありがとうございました。

質疑応答

── 去年、ダービー出場が途切れたが…。

正直言いまして、最近は力も落ちていましたし、ダービーに出たいって気持ちはもちろんあるんですけど、出られなかったことに関して、どうのこうのっていう気持ちはありませんでした。

── 周りにはいつ引退を伝えたのか？

以前から体重で苦労してまして、女房には体重が変わったら辞めるかもな、という程度の話はしていたんですけど。正式に、本当に辞めると言ったのは、最後の徳山の前検の2日か3日ぐらい前だったと思います。その時に「この次の徳山で辞める」と、女房に言いました。そうしたら女房は二つ返事で「はい」と。あとは何も言いませんでしたね。

（白井）英治とかに言ったのは…。実はですね、今回のこのような大掛かりな記者会見っていうのは、正直考えていませんでした。徳山のレースの予選が終わった5日目に発表しようかなと思っていました。最終日に発表すると、優勝者が出ますし、水をさすような形になるんで。5日目に発表して、明日の最終日がラストランですというような形でも十分かな、と思っていました。一緒に走っていたので、急に新聞なんかに書かれたりすると驚くだろうなと思って、4日目が終わった時点で、同じ部屋だった白井英治と寺田祥を「ちょっと話がある」と表に呼んで、実は今節がラストランだということを伝えました。白井英治は「聞いてない、聞いてない」と、自分の部屋に飛び込みましたけどね。

── ラストランにはどのような思いで臨んだ？

正直、多分レースにならないだろうなと思っていました。とりあえず、とにかく正常にスタートして、正常にゴールすることしか考えていませんでした。だから、あの…。ファンの皆様には本当に申し訳ないんですけど、自分の中では着順度外視というか。とにかく、ちゃんとゴールする姿だけは残したいなと思ってました。

それに、引退は下関のメモリアルかなと考えるようになってから、今まではそんなに恐怖心ってなかったんですけど、「今さらケガをしたら…」っていう部分が凄く出てきて、なかなかレースにならないなっていうのがありましたね。

今村豊が「いちばん嬉しかった」勝利。

1987年　平和島・第34回全日本選手権

第34回全日本選手権
（1987年10月13日・第10レース）

着順	枠番	選手名	出身・年齢	進入	ST
①	⑤	今村　豊	（山口・26歳）	4	06
②	❷	安岐　真人	（香川・42歳）	1	14
③	⑥	小澤　成吉	（愛知・48歳）	2	16
④	①	小畑　建策	（福岡・39歳）	6	15
⑤	❸	彦坂　郁雄	（千葉・46歳）	3	10
⑥	④	黒明　良光	（岡山・39歳）	5	10

▶2連単　⑤－❷　1,950円
▶決まり手＝抜き

「選手になった以上は一度は獲ってみたいタイトルですからね。もう感無量です。僕が行こうと思ったんですけど、彦坂郁雄さんが捲って行ってくださったんで、最高の展開になったですね。でも2Mで突っ込まれるんじゃないかと…。

（優勝戦の日は）自分でも硬くなってるのがわかるんですね。展示終了後、（31回大会覇者の）半田幸男さんが『無欲で行け』って言ってくれたんですね。それで気持ちが楽になりましてね…（涙）」

デビュー3年目で優勝、SG最年少覇者（当時）に。

1984年　浜名湖・笹川賞

第11回笹川賞
（1984年5月4日・第9レース）

着順	枠番	選手名	出身・年齢	進入	ST
①	❷	今村　豊	（山口・22歳）	6	18
②	⑥	角川　政志	（愛媛・30歳）	2	27
③	❸	柴田　稔	（静岡・43歳）	1	21
④	①	石塚　憲明	（静岡・40歳）	4	35
⑤	④	荘林　幸輝	（熊本・28歳）	5	20
⑥	⑤	安岐　真人	（香川・39歳）	3	37

▶2連単　❷－⑥　2,150円
▶決まり手＝差し

「何が何だかわかりません。無我夢中でした。1周目1Mで安岐さんに飛びつかれた時、転覆すると思ったですよ。必死でハンドルにしがみついとったです。10周くらいした感じです。

勝因はエンジンとスタート。小林嗣政さんと福永達夫さんに朝いろいろとやってもらって最高の状態になっていた。先輩らのお陰だと思っています。これからも自分と戦うのみです」

その差15cm、ゴール前逆転で完全V。

1986年　津・34周年

第15回つつじ賞王座決定戦【開設34周年記念】
（1986年6月11日・第12レース）

着順	枠番	選手名	出身・年齢	進入	ST
①	①	今村　豊	（山口・24歳）	5	18
②	❷	加藤　峻二	（埼玉・44歳）	4	20
③	⑥	新井　敏司	（栃木・38歳）	3	17
④	❸	瀬古　修	（三重・39歳）	1	29
⑤	④	石黒　広行	（愛知・45歳）	2	26
⑥	⑤	山本　泰照	（岡山・44歳）	6	22

▶2連単　①－❷　600円
▶決まり手＝抜き

「最終ターンに入る手前で加藤さんは慎重に回ろうとしたんでしょうね。落として回ろうとしました。僕は加藤さんに追いつくまでは握ったままでした。並びかけると同時に思い切ってハンドルを切ったんですが、それが上手い形で全速差しになったんですよね。

ゴールに入った瞬間は、僕が勝ったなんて思えませんでしたよ。こんな勝ち方って今まで一度としてないんですから」

未来のボートレーサーたちへ ～ボートレーサー養成所・選手講話より～

訓練時代はとにかく上手くなりたいと思って、いろいろなことを考えていましたね。

「いかにして1800mの最短距離を走るか」「ターンマークは飛び越えられるんじゃないか」「そのためにバウはどこまで持ち上がるのか」など、不可能を可能にできないかと考えていました。転覆も多かったですが、全速ターンを必死に練習しました。恐怖心はなかったです。

デビュー後も、他人より努力することが大事です。
何も考えずに乗るだけの人は、凡人です。
自分が上手くなりたいという気持ちがなければ、上達はしません。
他人から言われてではなく、自分で考えて乗ることです。やはり1周でも多く乗ることですね。今の若い選手にはそれがありません。師匠に怒られるから乗るのでは意味がないんです。

昔の自分より乗っている人を見たことがありません。
努力しない人に限って「自分はやっている」と言います。
努力する人は「まだ足りない」と言います。
日本一強い選手は、日本一努力しているんです。
収入面で満足しても勝てません。緩まず上を目指して、勝つまでやり続けることです。若い選手はとにかく乗って、ターン技術を磨いてから、プロペラ、整備を覚えていけば十分です。

稼ぐ選手は、水面以外の動きも良いんです。レースに参加する時は施行者、競走会、選手など、関係者への挨拶は必ずすること。開催が終わった時もそうです。時間があいたら会話をして、全ての人に好かれることが大切です。

稼げば稼ぐほど、人に好かれなければなりません。天狗になってはいけないし、周りから一流と認められなければいけません。

最初は先輩選手と会話することも難しいかもしれませんが、会話をして、名前を覚えてもらい、中に入っていく努力が必要です。稼ぐ選手はハッキリと会話をします。技術だけが稼ぎの差ではないんです。

私のレースの美学は、“他人にボートを当てないこと”です。スマートに勝つ。誰からも認められる勝ち方がしたいんです。だから、記念レースで相手が突っ込んできたら怒ります。「そこまでしないと勝てないのか？技術はあるだろ」と。

簡単に勝てるものじゃないですが、焦らず、努力を惜しまず、フライングは1年間せずに、とにかく乗る時間を作ってください。

（2011年8月30日・養成所にて）

── 地元・山口のファンの方へメッセージを。

全国のファンの方、私のファンの方、ボートレースファンの方々が凄く温かく見守ってくれて、そんな中で、やっぱり地元の山口県の方っていうのは、特に声をかけてくださいまして、本当にありがたいなって。地元で歩いたりしてても、背中を押してくれてるんだなっていうのも実感していますし、そのお陰でここまでやってこられたっていうのもあります。本当にファンの方があっての今村だな、っていうふうに思います。

── レーサーとして貫き通したことは？

まあ結果的にですね、貫き通したかどうかっていうのはわかりませんけど、“人にぶつかって行かない”っていう、その自分のレース形態っていうのは最後まで崩したつもりはありません。

操縦ミスでぶつかることは多々ありましたけど、意識的に艇をぶつけていくとか、勝つために手段を選ばずやってきた、ということはありません。それだけはこの39年とちょっと、貫き通せたかなと思います。

── やり残したことはありますか。

やり残したことがあったら、多分辞めていないと思います。本当に満足感で、今はいっぱいです。

── 今後、この業界での活動予定は？

何か職に就いて…とは、正直考えておりません。お手伝いが必要な時に、何かお手伝い程度であれば、手伝って行こうと思います。

── 今までに、引退を考えたことはありますか。

42、43歳の頃でしたかね、私がメニエールになって、めまいが出ていた時に。発作が起きてしまうとレースができないわけで、欠場になっちゃうんですね。その回数が増すにつれて「関係者の方に凄く迷惑をかけている」という気持ちになりまして。その時に引退を考えたことはあります。

でも、何とか踏みとどまって、とりあえずもうちょっと頑張ろうと。その後は徐々に発作が起きなくなって、めまいがしなくなってきて、ここまでできました。本当に良かったなと思います。

── 賞金王決定戦を獲れなかったのは悔いでは？

もちろん賞金王は獲れたら獲りたかったです。決して獲りたくなかったわけではありません。第1回から何回か続けて出て、その中ではチャンスもありましたし、獲りたかったんですけど。これも今村豊の人生かな、というふうに思います。全て獲っていたら、何もかも面白くなくなるじゃないですか。

それに、白井英治が「代わりに獲る」って言ってくれていますし、私の夢を英治につないだ、というふうに思っていただければ。

── 今のボートレース界に思うことはありますか。

今、凄く売上的にも上がって、良い状態にあるんで、あのバブルの時の売上をもっと超えて行って欲しいです。

ネット会員とか電話会員が凄く増えてきて、ボートレースを知らなかったファンの方もそれで知ってくださったと思いますし、どんどんファンの皆様でボートレース界を盛り上げてくれれば、もっと素晴らしい世界になってくると思います。

── 今村さんにとって、ボートレースとは？

私の人生そのものです。

高校を出てすぐに本栖（研修所）に入りまして。訓練を受けてデビューして、60歳にはなってませんけど、59歳を過ぎまして。一般社会で言うところの定年の年齢を迎えているわけですから。ボートに始まってボートに終わった、と言っても過言じゃないと思います。

── 今後のボートレースはどうなってほしい？

舟券が当たった、外れたじゃなくて、「ボートレースって本当に見ていて面白いよね」というようなレースをして欲しいと思います。目が肥えたファンの方じゃなくても、初めて見た方でも「ボートレースって面白いよね、見るだけでも良いよね」って言ってもらえるような、そういったレース形態になって欲しいと思いますね。

今、コロナ禍の中にあるわけで、入場制限とかありますけど、これが解除された時に、是非とも、本場でレースを見ていただきたいと思います。

私も選手をしていて、当然、現場でレースを見ますし、テレビ画面でもレースを見ますけど、どちらが面白いかって言ったら、生で見るボートレースのほうが面白いと思います。なるべくなら現場に来て、生のボートレースを見て欲しいですね。

── 体重管理に苦労されていたと思いますが、具体的には？

私が元々ボートレーサーになったというのは、子供の頃から体が小さくて、体重が軽い。それを見て親父が「選手になれ」って言ったんでしょうけど。それで選手になるわけです。一番減量した時で43kgまで落としたことがあります。その時は最低体重というものがないので、いくらでもそうしていくわけです。自分は、練習して汗をかくだけで自然と体重が落ちてくれるし、ちょっと食べなかったらもっと落ちるっていう…。減量はそんなに苦じゃなかったんですね。

でも、健康上の問題で“最低体重”というものができまして。普段は45kgあたりで走ってたんですけど、今度は「太らないといけない」となったわけです。食べたくないものを食べるっていう辛さって、まあまあ辛いものがありまして。

まして、今走りました、宿舎に帰りました、すぐ食事という、マラソンして帰ったような状態で、すぐに飯を食えと言われても、辛いもんがあるんですね。腹が空いていれば別なんですけど。

嫌々ながらも一生懸命に食べて、食べて…と繰り返しをしていると、食べること自体が苦痛になってくる自分がいるわけです。だから私は、減量するよりも増量するほうがきついな、とずっと思っていました。

── 39年の間にボートレースで変わったことはありますか。

39年ちょっと前にデビューしてから現在までとなれば、何もかも変わっています。何かが変わったっていうより、全てが変わったと思います。ただ、優勝戦が4周というのはあったんですけど、ボートレースが3周というのは変わっていないですね。そのくらい、ほぼほぼ変わりました。

私がデビューした時は、カウリングすらなかったですし、ヘルメットも“ドカヘル”と言ったような形のヘルメットでしたね。今は、顔を隠したフルフェイスになっていますから。変わってないものがないぐらい、変わっているんじゃないかなと思います。

そういう変化にも、ソコソコ対応してきたつもりではありますけど、年齢とともに対応できなくなりますね。難しくなってきます。

いまむら　ゆたか

1961（昭和36）年6月22日生まれ。山口支部・48期。選手登録番号2992。

銀行員を目指していたが、選手募集パンフレットの年収に驚く。「腕一本、努力と実力次第で収入が決まるのなら、その世界に飛び込んでみたい」と、山電交通の運転手だった父の夢・ボートレーサーの道へ。「全速ターンをマスターしないと本栖（研修所）を卒業させてもらえないと思っていた」ため、転覆回数は2番目の人の倍以上だったとのこと。

81年5月、19歳でプロデビュー。デビュー後は大外を四角く2周する待機行動と全速ターンで数々の記録を塗り替えた。その後はＦ連発でＳＧ戦線から離れたり、難病「メニエール病」に悩まされるもトップレーサーとして活躍し、2004年に最優秀選手（最多賞金・最多勝率・記者大賞も）に選ばれる。20年10月8日、59歳で現役引退。ＳＧ優勝7回、ＧⅠ優勝48回。

◆通算成績　（1981年5月7日～2020年9月28日）

出走回数	勝率	2連率	3連率	優出	優勝	F	L
8207回	7.76	55.9%	71.1%	410回	142回	59回	3回

3159 江口　晃生（群馬）

「今村選手は、私にとってボートレーサーとしての目標であり、憧れの存在でありました。また、これまで数々の記録を達成され、まさにボートレース界のパイオニア的な存在でした。同世代ながらずっと憧れていた選手だけあって、引退は非常に残念です」

3783 瓜生　正義（福岡）

「今村さん、40年間選手生活お疲れ様でした。僕は今村さんの選手としての考え方だったり、姿勢をお手本にさせていただいていました。本当にありがとうございました。

僕が言うのもなんですが、今からまだまだ人生長いでしょうから、第二の“今村豊人生”を楽しんでください。どうも、本当にお世話になりました」

3897 白井　英治（山口）

「師匠、40年間本当にお疲れ様でした。僕をここまで育ててくれて、ありがとうございました。本当に寂しいし、悲しいですけれど、これからは今村さんが唯一成し得なかった“賞金王になること”を、最高の恩返しと思って、日々精進していきたいと思います。

そして今村豊ファンの皆様、僕がこれからは、家もものすごく近いですし、家に遊びに行ったり、ゴルフに行ったり、僕がそばで見守っていきますので、どうか安心してください。師匠、愛しています！」

3942 寺田　　祥（山口）

「今村さん、40年間長い間本当にお疲れ様でした。僕と走った20数年間、本当にありがとうございました。今まで、いろいろなことを助けていただきましたが、自分自身、今から助けてもらいたいことも、たくさんあったのですけど、それも今村さんの引退で叶わぬこととなりました。

これからはプライベートで、ゴルフを一緒に楽しみたいと思いますので、ぜひゴルフのご指導をよろしくお願いします。本当に長い間お疲れ様でした」

4168 石野　貴之（大阪）

「59歳までトップとしてＳＧなどで活躍され、とても真摯に仕事に取り組んでおられました。ボートレーサーとしてのお手本であり、偉大な方でありました。第二の人生も身体に気をつけてすごしていただきたいです」

4238 毒島　　誠（群馬）

「今村選手は、子供の頃からずっとスター選手でした。ボートレーサーとして一緒に走らせていただいて、非常に勉強になりました。また、仕事に向かう姿勢も非常に心に残っています。これからも今までどおり、笑顔の絶えない人生を送って欲しいです」

1980年

女子特別募集（大量養成）が始まった48期生として山梨県・本栖研修所に入所。模擬レースの勝率は2位、転覆回数（12回）はダントツ。

模擬レース成績

勝率	2連率	事故率	出走	F	L
8.02	74.4%	0.49	82	1	0

教官評「スピードがある。事故が多いけど、うまく伸びれば相当な線まで行きそう」

1981年

5月・徳山でデビュー。初戦で水神祭を飾り、いきなり優出と、鮮烈なデビューを果たす。

1節走って80万円もらいました。当時は手渡しだったので、80万円を鞄に入れて電車に乗ったんですが、なくさないか心配で、ずっとその鞄から目が離せませんでした。80万円は大金でしたから、本当にヒヤヒヤしたんです ――――今村

11月・デビュー期に勝率6.20をマークし、Ａ級昇級を決める。デビュー期6点勝率でＡ級昇級したのは斉藤廣、津田富士男に続き、史上3人目。

デビュー期の節間成績

5月	徳　山	①④③③②①2❸
6月	宮　島	④⑤④④⑥
7月	唐　津	①⑤①④②④④②③②⑤
7月	平和島	②③⑤③④②③③
8月	徳　山	④①⑤③②③⑤
9月	下　関	③④②①④③⑥①④①①1
10月	児　島	⑤①④⑥②⑤
10月	住之江	①②①①①②③②②❷

デビュー戦で1着が獲れて、優出もできて、その後も結果が残せたのは、他人の真似をして、何度も練習をしたからだと思います。とにかく水面に出るのが好きでした ――――今村

1982年

2月・中国地区選（児島）でＧⅠ初出場。
5月・笹川賞（住之江）でＳＧ初出場。ＳＧ最短出場記録を更新する（デビュー1年1ヵ月目）。
7月・丸亀30周年でＧⅠ初優出、初優勝。

（ＧⅠ初優勝した）その次の日も練習に行きました。皆から『おまえ記念を取ったんじゃろ？』と驚かれましたけど、僕にはそれが普通だったんです ――今村

10月・全日本選手権（桐生）でＳＧ初優出。
年間表彰で初の最優秀新人選手に選ばれる。

1984年

4月・笹川賞（浜名湖）でＳＧ初優勝。
1992年10月、服部幸男（当時21歳）が全日本選手権で優勝するまでＳＧ最年少優勝者（22歳）の記録を保持する。

1986年

勝率8.05で初の年間最高勝率選手に輝く。

1987年

10月・ＳＧ全日本選手権（平和島）初制覇。

例えば、ＳＧの予選をみんな2着でクリアして、優勝戦だけ1着になる。これを年間6回やれれば、年にたった6勝しかしてないのに、確実に賞金王になれますね。記念のパーフェクト優勝を、たとえ6回やっても、かなわない。どっちが価値があると思いますか？　出るメンバーはほとんど同じなんですよ。

僕が勝率に重きをおいているのは、勝率はそういう意味で全部の積み重ねだからです。ダービーに勝つのが、真のNo.1だから。ダービーの勝者こそがトップなんです ――――今村

1988年

10月・元選手の庄島真知子さんと結婚。

1990年

年間表彰で初の最優秀選手に選ばれる。

1995年

生涯獲得賞金10億円突破。

1997年

12月・第12回賞金王決定戦でまさかのイン取り敢行。

ああ、すごいスタンドがどよめいてましたね。ええ、わかりましたよ。僕が西島（義則）の内を取ったからでしょう。あの段階では、僕としてはしてやったりと思ってましたからね ――――今村

1999年

8月・メニエール病の症状悪化で1ヵ月半欠場。

ほんのちょっと、10cmでも動かされると吐くんですよ。目を開けたら風景がグワーン、グワーンと揺れるから目も開けられない。このままつづくんだったら殺してくれと思いました ――――今村

2004年

3月・総理大臣杯（福岡）で、11年7ヵ月ぶりのＳＧ優勝。

やっと（全モ連）会長を表彰式に呼ぶことができました。優勝戦の日にクランクシャフトを交換した。エンジン的には優勝できる状態ではなかったけど、最後まで諦めずにやってきたことが報われたのかもしれません ――――今村

生涯獲得賞金20億円突破。
年間表彰で初の最多賞金獲得選手となる。

2007年

1月・通算2000勝を達成。

2015年

4月・第16回マスターズチャンピオン（児島）で完全優勝達成。

2017年

4月・24場制覇達成。

2018年

6月・地元徳山のＳＧに初めて出場。

この年齢になって、記念レースに出場できるなんて、こんなに嬉しいことはありませんよ。それに、徳山でＳＧが開催されるのは64年ぶりなんでしょ？　そこに自分がいるなんて想像したことがありません ――――今村

2020年

5月・78期連続Ａ級となり、北原友次の持つ記録を更新。
10月・現役引退。

植木　通彦 ●ボートレースアンバサダー

「私にとっては、瓜生選手も言われていましたけど、お手本、目指す大先輩でした。その引退会見に花束を渡すという、大役を務めさせていただきました。花束にはですね、この場所に来られない、たくさんの方の想いを、私なりにイメージして、（その想いを込めて）お渡しさせていただきました。

今村豊選手の活躍は、私が言うまでもありません。もうスーパースターです。私は1986年に第59期生として、ボートレーサーになりました。その時はもうトップレーサーとして活躍をされていまして。私たち世代、第59期は、今村選手を目指して日々養成訓練に励んでいたことを思い出します。

そのような長きに渡って活躍されていた今村豊選手の引退ということで、ファンの皆様は納得される方、まだ走るのを見たいと思われる方など、さまざまな想いがあろうかと思います。しかし、“新しい何かをする姿を見たい”という想いは、全ての、多くの皆さんの期待する所ではないかなと思います。私もそう想う1人でありますので、ぜひよろしくお願いしたいなあ、と思います。あ、少し笑みが出て僕もホッとしたんですけど（笑）。

最後になりますけど、本当に減量の時代、いろんな制度の問題、凄い先輩の、層の厚い中で立ち向かっていく凄さを、私も肌で感じておりました。そのような先輩が今日、レーサーということを終えるわけです。本当に長きにわたり、大変な好不調のなか、素晴らしいレースを僕たちに見せてくれて、どうもありがとうございました。これからもどうぞ頑張ってください」

（2020年10月8日・引退会見にて）